

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02424

研究課題名(和文) イシス神を巡る表象についての理論的、図像学的、比較文化的研究

研究課題名(英文) Research on the cosmotheism in european modern thought

研究代表者

坂本 貴志 (SAKAMOTO, Takashi)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：10314783

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：イシス神のイメージの興隆を近代において可能ならしめた理論的背景にあったのは「世界の複数性」の議論である。「世界の複数性」を受けて古代神学の立場をとるならば、キルヒャーに代表的であるように、イシスをひとつの鍵として地球上における啓示の普遍的な拡がりを見ようとする普遍史が結果する。対して、「世界の複数性」を受けて、キリスト教に到る啓示の歴史を特別としないのであれば、無神論の立場が一番合理的であることが比較文化的にも了解されるが(司馬江漢と山片蟠桃)、あえてなお神性をそこに見る立場もあり、それが物活論的なヘルダーの立場であり、これはゲーテに基本的には共通している。

研究成果の概要(英文)：It is the debate on 'the plurality of the worlds' that exists behind the wide emergence of the images about the goddess Isis in the European period after the Renaissance. A. Kircher represents a reaction based on the view from the universal history by regarding Isis as a key to find universal spread of the revelation only on the earth. At the other hand Japanese thinkers in the 18th Century, Siba Kokan and Yamagata Bantou, insist on the atheism to comprehend 'the plurality of the worlds'. J. G. Herder stands on the hylozoism to regard the worlds as a one organic revealed system of the Divine, and Goethe owns this point of view.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：イシス スピノザ ヘルダー ゲーテ キルヒャー 世界の複数性 豊饒神 エフェソスのディアーナ

## 1. 研究開始当初の背景

本研究者が受けた科学研究費補助による研究、基盤研究C「ドイツ近代とヘルメスの伝統についての研究」(平成21~23年度)において、ヘルメスの伝統とはそもそも何かという問いを、古典古代、ルネサンス、近代の歴史的三層を通じて明らかにしつつ、そのヘルメスの伝統の具体的な様相を、これまで関わりの余り指摘されてこなかったドイツ近代の思想家文学者(カント、シラー、ゲーテ等)の中で検討した。その結果得られた認識は、ヘルメスの伝統の一つの核心が、「ヘン・カイ・パン(一にして全て)」という新プラトン主義的なモットーとして表現される、というテーゼであった。このテーゼを宇宙論の革命という思想史上のモメントからさらなる考察を行っているのが、基盤研究C「ヨーロッパ近代における「宇宙論的神学」の生成について」(平成24~26年度)である。宇宙論の革命において自然世界は有限から無限へ、地球は世界の中心から、無限の中の拠るべきなき島となるが、これと並行して、無数にあるであろう惑星の住民は、啓示宗教の説く救済といかなる関係を持つのかという問いが生まれる。こうした「複数化した世界」の中では、無限の惑星上にそれぞれ登場することになる知的住民達の階層的序列化が「存在の連鎖」(アーサー・ラヴジョイ)のイメージに依拠しつつ夢想される(カント、シラー、レッシング、ゲーテ、クライスト)。これを下支えする観念が、一なる神的な根源からの流出として世界を眺めるヘルメス主義の、「ヘン・カイ・パン」の思想であり、それが古代エジプトに発する女神イシスを巡る観念とその図像的表現によって了解される(カドワース『宇宙の真の英知的体系(The true intellectual system of the universe)』1678)との認識が得られた。一と多を繋ぎ合わせる観念は、宇宙論的な背景をもちつつ、地球上において、大航海時代以後日々グローバル化

する中で発見されつつあった様々な事象をも統合するように機能する。それが、地球上の自然および文化現象をいずれも、一なる女神の多様な現れであると理解しようとする古代神学的な(D. P. ウォーカー『古代神学(The Ancient Theology)』1972)態度となる。この知的態度の近代ドイツ・ヨーロッパにおける理論的側面(ヤコービ、レッシング、ヘルダー、ゲーテの汎神論)と、図像学的側面(エフェソスのディアーナ像として)、地理学的側面(ゲオルク・フォルスターおよびアレクサンダー・フォン・フンボルトの敢行する遠征旅行)と関わる比較文化的側面(アタナシウス・キルヒャー)を考察することが新たな研究テーマである。とりわけ比較文化的側面においては、ヨーロッパ近代が異文化に遭遇したとき、つまりはインドや中国、そして日本の仏教思想に触れる際、それら異文化圏における神々をも、ヨーロッパが古代から知る神イシスの多様な現れの一つとして理解しようとし、具体的には観音をも「シナのイシス」として了解しようとした意味を明らかにしようとする。つまりは、一なる神の、宇宙における様々な惑星上における多様な現れを、地球上の異なる文化圏における多様な現れとしてミニマムに理解しようとした可能性を新たに考察する。

## 2. 研究の目的

本研究は、古代エジプトを出自とする女神イシスを巡る思想と観念を、ヨーロッパ近代、とりわけドイツにおける継承と展開、その図像的表象の具体的な様相、比較文化的な対象理解における応用、という三つの観点において明らかにする。女神イシスは、古典古代期における諸神混交の中であらゆる女神を統合するイメージとなり、ルネサンス以降のヨーロッパでヘルメス主義が新たに受容されるときに図像的モットーとなる。イシスを巡る想念の近代における理論

的背景を、ドイツ近代の思想家達に焦点をあてて考察し、またイシスを巡る図像が人々の集合的な記憶の中で具体的に表現されるその図像的な特徴と実例を収集考察し、さらにイシスを巡る観念とイメージが、ヨーロッパから見て異なる東洋文化、とりわけ仏教の理解において応用される様を検討する。

**α 理論的側面での課題：**

イシス神のイメージを成立させる背景にあるところの、18世紀ドイツにおける汎神論に関して、「神即自然」の理論では本来否定されるはずの超越神が、なお「神即自然」の理論と調和する可能性を考究する。新プラトン主義的な意味での、「一者（ヘン）」、すなわち根源からの「流出」として「自然（パン）」を理解する理論的立場「ヘン・カイ・パン」が、レッシングおよびゲーテによって意識されていたのではないか、という問題を理論的に明らかにする。

**β 図像学的側面での課題：**

イシスは近代においては「エフェソスのディアナ像」という特殊なイメージにおいて理解される。この図像が、ルネサンス期のヨーロッパ以降の時代に集合的な記憶として共有されていたことを明らかにし、ドイツ 18世紀および 19世紀初頭の様々な文化と思想の中で用いられる具体的な様相を実証的に研究する。

**γ 比較文化的側面での課題：**

アタナシウス・キルヒャーはイシス神の持つ包括的かつ統合的な性格を、異文化理解の場面で応用的に使用した。「シナのイシス」という認識によって、キルヒャーは、東洋世界をもまた古代神学的な根源としてのエジプトに接続するのだが、それは、一なる神の、宇宙における様々な惑星上における多様な現れを、地球上の異なる文化圏における多様な現れとしてミニマムに理解しようとする態度の現れではなかったか。このテーゼの正否を検証する。

### 3. 研究の方法

α の理論的側面の課題を解決するためには、近代ドイツにおける汎神論の展開に決定的な影響を与えたスピノザの哲学を理解することがまず必要な手続きとなる。その上でスピノザ対ライプニッツという構図によって汎神論対超越神の対立を明確にし、この対立を解消する試みとしてレッシングとゲーテの思想を解明する。β の図像学的側面では、ルネサンス期におけるイシス像の確定を確認して、そこで抽出される図像的属性を整理した上でできる限り幅広い図像サンプルを 18・19 世紀の文献に求めていく。γ の比較文化的側面では、東アジアのいかなる情報がイエズス会の中にもたらされ、それがキルヒャーの古代神学的な構図の中に収斂しゆくのかを分析する。

### 4. 研究成果

**α 理論的側面：**

「ヘン・カイ・パン」、すなわち「一即全」というイメージは、一なる根源からの流出として世界全体を捉えるという立場と、多様な世界全体がひとつに統合されており、同時に一つであるという立場を二つともに含意する。前者は、新プラトン主義的な世界了解の立場であり、これはイシス神をひとつのシンボルとするヘルメス主義のそれであり、さらに人格神を担保し、理神論の立場を取るライプニッツに受け継がれているとみることができる。他方で後者の「ヘン・カイ・パン」理解がスピノザの立場ではあるが、これは自然の様相を内在的かつ合理的な原因に基づいて了解しようとしたギリシア自然哲学の系譜にあるものと見ることができる。ドイツ・バロック期から 18 世紀近代にかけての「ヘン・カイ・パン」の興隆は、とりわけ前者に理解に基づくものであり、ヘルダーもまた後者スピノザの立場を、前者に近づけて理解しようとしたと理解される。その際ヘルダ

ーは、レッシングのスピノザ理解が中途半端なものであったとし、その根拠を自らのライブニッツ理解に据えている。すなわち、物体に固有のエネルギーこそが、精神と物質の二元論（デカルト）を克服する鍵であって、この鍵がスピノザには見えておらず、レッシングもまたこれに思い至らなかったとする。ヘルダーのこの立場は明瞭に物活論のそれであるが、万有が神性を帯びているというその思想はカドワースにも共有されてある。スピノザ理解に基づいてヘルダーは、万物を構成する素材とその原因を合わせたものとして「有機体的力」を措定し、万物の有機体的生成とその一体性を「ヘン・カイ・パン」の様相であると理解している。この有機体的世界宇宙の構成原理が「有機体的力」であり、ヘルダーはこれを復讐の女神の名アドラステア *Adrastea* をもって呼んでいるが、復讐の女神が豊饒の女神と表裏一体であることを思えば、ヘルダーのアドラステアは、本研究テーマのイシス神の別なる様態として理解することができ、またそれがゲートにおける「変身（メタモルフォーゼ）」のイメージと基本的には連絡していることが了解された。この理論的研究を通して得られた重要な視座は、他の天体の住民を想定する「世界の複数性」が、ルネサンスにおける原子論の復活と軌を一にしていること（トーマス・クーン）であった。また「世界の複数性」は、ヨーロッパ以外の地球上の他の住民に投影して理解することが可能であり、ここから普遍史との関わりで「古代神学」を位置づけることが可能になった。

β 図像学的側面+γ の比較文化的側面：

ヴァチカン図書館における調査の結果、エフェソスのディアーナ/アルテミスの図像が、17世紀の様々な文献の中で、イシスという名を冠することなく様々に描かれていることが了解された。大地の豊饒性を表すこの図像がバロック期のイタリアでとりわけ愛好さ

れたことが確認されたが、他方で古代ローマ世界において多様に信仰された様々な豊饒神は、その信仰の場所と図像がキリスト教の時代以降に徹底して破壊されたことも認識された。イシスが豊饒神として図像的には理解されたその伝統を踏まえるならば、イシスのルーツを求めて豊饒神とその密儀の痕跡を広く地中海圏ならびにヨーロッパに探し求める必要が生じ、そのためにネミ湖、ウィーン自然史博物館、タルシーン神殿遺跡、クノッソス宮殿遺跡、イラクリオン古代博物館、ミラノ市立考古学博物館、エーリチェにおいて調査を行うこととなった。また比較文化の観点から、日本における豊饒神信仰、とりわけ弁才天を取りあげて、江ノ島、竹生島、伏見長建寺、京都蚕の社にて調査を行った。得られた結論は、イシス神がエフェソスのディアーナ像の姿においてヨーロッパの17世紀および18世紀において共有されていたというよりは、イシスが代表した豊饒神、あるいは生成を繰り返す自然そのものがエフェソスのディアーナの姿を通して表現されたこと、豊饒神ないしは豊饒なる自然こそがαの理論的側面で明らかになった認識を理由として、ヨーロッパの近代において表現の対象となったと考えられる、というものであった。その豊饒神は、エフェソスのディアーナ像を「ヘン・カイ・パン」の思想を背景にひとつには近代において獲得したけれども、基盤研究C「ヨーロッパ近代における「宇宙論的神学」の生成について」の際に行ったクークリアでの豊饒神研究の結果を踏まえるならば、その本質的かつ普遍的な表現は、三ないしは三角形の姿を取ると考察された。一方でキルヒャーがアジア文化圏の仏像を「シナのイシス」として理解した背景には、エジプト伝来の啓示の普遍性をアジア圏にも見ようとする普遍史ならびに古代神学の伝統があったと認識された。古代神学は、一なる神の、宇宙における多様な現れを、地球上の

異なる文化圏における多様な現れとしてミニマムに理解することを排除するものではないが（ヘルダー）キルヒャーに関してはこのテーゼは非とされるべきであろうと考えられた。他方で、普遍史の立場に立つことがない、非ヨーロッパ圏の知性が「世界の複数性」を前にするならば、むしろ当然のことながら啓示宗教の虚偽性と無神論をこそ合理的とする認識へと導かれる様が、日本の18世紀の知識人、司馬江漢と山片蟠桃を例として確認された。また司馬江漢がキルヒャーを知っていたことは、玉川大学教育博物館の資料に即して確認され、普遍史を論駁する彼の立場が、ヨーロッパにおいても問題となった化石という現象に即してなされていたことも合わせて了解された。

結論：

イシス神は、理論的には、新プラトン主義とヘルメス主義の世界了解のイメージとして、具体的には「エフェソスのディアーナ像」として近代に到るまでに伝承された。近代において積極的な興隆を見た背景には、「世界の複数性」の議論があり、これはキルヒャーの場合に典型的であるように、例外現象としての地球上における啓示の普遍的な系譜の歴史の中で、他の文明の宗教現象をも「シナのイシス」を例として包摂しようとした。イシスは、エジプトが啓示の記憶の伝承の中で特権的な地位を占めたがゆえに（古代神学）やはり特別な意味合いをキルヒャーの場合には持つことになる。一方で、「世界の複数性」の議論を受けて、他の天体の住民に対する啓示の可能性を否定しないのであれば、あるいは、啓示の意味を合理的な法則と解釈してその現れを幅広く自然現象の中に探していく自然神学ないしは理神論の立場をとるならば、イシスよりは豊饒の現象そのものを神的と捉えゆくヘルダーやゲーテの立場が生まれてくる。ゲーテはイシスを知っていたが、古代神学の立場に立つことはなかった

が故に、むしろ豊饒神をこそ自然現象にある法則性を発見するための鍵と見立て、また文学表現においては『ファウスト』に代表的であるように、死と再生を繰り返す豊饒の自然を「永遠に女性的なるもの」としてそこに神性をみた。ゲーテの『ファウスト』には地中海豊饒神が多様に形象化されており、「エーゲ海の祭り」の場面はとりわけ古代の密議宗教の秘儀を再現した観があるが、神秘の窟屋と水と女神のエロティックな構図は、日本やインド（サラスヴァティー）に置き換えても普遍的に意味するところは同じなのであり、この点で、「自然即女神」の文学的表現が、「世界の複数性」の時代における、神性を巡るひとつの普遍的な解であることが最終的に認識された。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

坂本貴志, „Mütter“ und Petron von Himera - Eine Untersuchung über gedanklichen Hintergrund von Goethes Faust, Asiatische Germanistentagung 2016 in Seoul 論集(査読有、印刷中)

坂本貴志, Die Funktion eines Utopiebilds im Hinblick auf ‚die Mehrheit der Welten‘ - Athanasius Kircher und Yamagata Bantou -, Akten des XIII. Internationalen Germanistenkongresses Shanghai 2015 - Germanistik zwischen Tradition und Innovation Bd.8. (査読有、印刷中)

坂本貴志, ヒメラのペトロンと「母たち」 - 世界の複数性の時代におけるゲーテのオリエント観、シェリング年報 25号、(頁50 ~ 59) 2017年(査読論文)

坂本貴志, 普遍的自然史の構築 - キルヒャーとヘルダーの「古代神学」 -、岩波書店『思想』1105巻5号、(頁94 ~ 113) 2016年(査読無)

坂本貴志, Tarnung und Transbildlichkeit - Die Krypto-Christen in Japan und Mutter Gottes, Interlingualität · Interkulturalität · Interdisziplinarität - Grenzerweiterungen der Germanistik, Asiatische Germanistentagung 2012 in Beijing 論集、(頁910 ~ 919) 2015年(査

読有)

〔学会発表〕(計 10 件)

坂本貴志, Transformationen der Göttinnen in Europa und Japan, DAAD(ドイツ学術交流会)主催 GIP(独文科相互交流プログラム)によるボン大学での講演、2017 年。

坂本貴志, 世界の複数性と永遠の哲学 - ゴットシェートと山片蟠桃、日本 18 世紀学会第 39 回全国大会: 共通論題 2 「世界の複数性」, 2017 年。

坂本貴志, Weltanschauung und Archiv - Eine komparatistische Untersuchung über enzyklopädische Gedanken bei Johann Christoph Gottsched und Yamagata Banto, Interpretation nach der „digitalen Wende“ - Internationales Symposium des SFR-Projekts der Rikkyo-Universität, 2017.

坂本貴志, „Mütter“ und Petron von Himera - Eine Untersuchung über gedanklichen Hintergrund von Goethes Faust - Asiatische Germanistentagung 2016 Seoul, 2016.

坂本貴志, 「世界の複数性」の投影としての「オリエント」- ゲーテ『ファウスト』の「母たち」と『西東詩集』- 日本シェリング協会第 25 回大会 クロス討論 I 「シェリングの時代におけるオリエント観」, 2016 年。

坂本貴志, 共同討論問題提起 II 『バハオーフェンとニーチェにおける文献学から哲学へのロマン主義的転回』, 日本ヘルダー学会春季研究発表会、2016 年。

坂本貴志, ヘルメス学、ヘルダー以前とヘルダー、シラーとの関係、日本ヘルダー学会秋季研究会、2015 年。

坂本貴志, Die Funktion eines Utopiebilds im Hinblick auf „die Mehrheit der WeltenXIII. Kongress der Internationalen Vereinigung (IVG), 2015.

坂本貴志, 「古代神学的諸世界」対「無鬼論的諸曜」- アタナシウス・キルヒャーと山片蟠桃の宇宙論および比較宗教論について - 第 3 回九大独文科学研究会(黙示録文化) 2015 年。

坂本貴志, Thought of the acentric infinite universe in the Japanese 18th Century - Bantou Yamagata and his view on the innumerable worlds, 14th International Congress for Eighteenth-Century Studies, 2015.

〔図書〕(計 2 件)

坂本貴志, 『「神話」を近現代に問う』(植

朗子・南郷晃子・清川祥恵編、共著) 担当箇所: 『永遠に女性的なるもの』の相のもとに - 弁才天考、勉誠出版、全 256 頁、2018 年。

坂本貴志, <新しい人間>の設計図(共著) 担当箇所: II 近代: 新しい人間の創造シラーの美的「群体」とトランブレーの「ヒドラ・ポリプ」, 青灯社、全 321 頁、2015 年。

## 6. 研究組織

研究代表者

坂本 貴志 (SAKAMOTO, Takashi)

立教大学・文学部・教授

研究者番号: 1 0 3 1 4 7 8 3